
月光陛下と太陽妃

月藤 琳

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月光陛下と太陽妃

【Zコード】

Z9745T

【作者名】

月藤 琳

【あらすじ】

幼い頃湿原で出会った少年は自分を月だと称し、あたしを太陽のようだと称した。

その後に会うことはなかつたけれど、どうしてかその人のことが忘れられずにいた。

時を経て突然現れた帝都からの使い。

思い出の人を探しているという皇帝陛下の皇妃候補。ちょっとした哀れみからお試しで引き受けてしまったあたしに待つてるのは一体どんな未来なのか。

幼い頃の出会いが奇跡を呼ぶ。
のちに月光陛下と太陽妃と呼ばれることになるふたりのお話。

プロローグ

とある場所に「アラルガント」と呼ばれる大きな帝国がありました。その國の王は女性と見間違えるほどとても美しいと言つて評判でした。

しかし国王はその容姿を隠すように仮面をし全てを遮つていました。

顔を見ただけで人々は見惚れてなにも手につかなくなってしまうからでした。

國にはたくさん美しい娘たちが居ましたが誰ひとりとして王の前で平静を保てるものは居ませんでした。

頭を抱える宰相や家臣たちは考えました。
用は慣れればいいのだと考へ國中を探し回つたのです。

「と言つわけなのですが・・・・・」

「断る。可愛い妹を嫁になどやうん」

長つたらしい説明のあとに一刀両断した。

今まで自分たちが守り育ててきた妹をそんな面倒」との起きそつな場所へとやつてたまるか。

例え皇帝の嫁であつたとしてもそれだけはいやだった。

「しかしこれは国中の問題です！」

「そんなの周囲にこじらぐ転がつているだろ？ それはつまりあれか？ うちの妹が男勝りだとでも言いたいのか」「滅相もない！！ 妹殿は乗馬をされたりなどするとしても活発な方だと聞いております。」

先程から嫁に来い、嫁には出さないの堂々巡りだった。

「とにかく妹を嫁にはやらない。帰つてくれ」

父親は出張でいないし母親はその父親についていつて帰つてこない。

実質、家を取り仕切つているのは長男である自分だった。追い返して数分ほどして妹が帰つてきた。

「ただいま」

「お帰り、ラヴィ」

「今日もあの湿原に行つて來たのか？ お前はあの場所が好きだな」

四人兄妹の末っ子であるラヴィを俺たちはとても可愛がつっていた。

「お客様でも来てたの？」

「特に気にする必要はないから」

何度も追い返してやる。

「あ、そういうえば今日湿原でとても綺麗な人を見かけたわ」

「あの辺りは一応観光名所だから観光にでも來たんだろう」

「そりやか。あの人ひとりだった気がするけど」

ラヴィイが首を傾げながら疑問符を浮かべていた。

愛らしい妹を絶対に嫁などにやるものかと改めて心に誓つた俺たちだった。

翌日、朝食を食べ終えて少しばかりの休憩を取つていた。
客だと書つ報せにため息をつきながら応接間へと向かう。

「またあんたたちか・・・」

昨日と違つのはフードを田深に被つた怪しい人物が壁に寄り掛か
つていふこと。

「ご本人様に会わせていただけませんか
「妹は嫁にやらないと何度も言つたはずだ」

一国の宰相が自らやつてきたのだからそれほど重要なのは分かる。
本人には報せていないがきっと優しいラヴィイのことだから了承し
てしまつ。

「田に見えてあの子が苦労するのが分かるような場所、皇帝の嫁に
はやりたくない」

「それに関しましては来ていただけるのでしたら最善を取くします

そう、忘れていたのだ。

客が帰るまで部屋から出るなといふのを云ふことを。

プロローグ（後書き）

突然的にはじまりました。なんとか完結できるように頑張りたいと思います！

思に出の中のあなた

「お兄ちゃん、どうしてそんな落ち込んだ顔しているの？」

家族と遊びに来た澤原ぐりひとつの少年とであった。
きらきらと光る綺麗な銀髪と澄んだ灰色の瞳を持つて居るのこれが隠すように俯いていた。

「…………キミは……この近くの子？」

「うん。家族で遊びに来てるの」

「家族、か」

どうか淋しそうに少年は呟いた。

「？ お兄ちゃん、家族は居るの？」

「居るけど…………仲はあまり良くない」

瞳が揺らいたのが見えて頭を撫でてあげた。

「あたしが泣きやうになるとこいつもお兄ちゃんたちがいるしてくわるの」

「うう言つてこいつと笑つた。

眩しそうに手を組めたかと思つと少しだけ笑つた。

「キミは太陽みたいだ。それに比べて僕は…………」

「あたしがお日さま？ ならおにこちゃんはお月様？」

「お月様、か。円はひとつじゅ光ることは出来ない。確かに僕にぴつたりだ」

しゃがんで目線を合わせると瞳は揺らいでいなかつた。
覗き込むよじこしていたのが気に障つたのか視線はそりとれてしまつたけど。

「んーと、お田さまとお田様つて追いかかつこしてるんだよね?
もしお田さまだけならお田さまもきっとひとりで淋しいよ。お月様
が居てくれるからお田さまも輝いてるんじやないかな。あのね、
あたしお月様好きだよ。お月様つてお兄ちゃんの髪みたいにきらき
ら光つてとっても綺麗だもん。」

遠くで自分を呼ぶ声がある。

「 もう行かなくなっちゃ
」

立ち上がるといつも自分がしてしまつてこるよじこ少年の額にち
ゅつと口付けた。

「これ元気が出るおまじないなんだつて。元気出してね、お兄ちゃん
」

手をふつてお別れを告げると互いに氣味に手を振り替えしてくれ
た。

それを確認してあたしは家族と合流した。
その少年と湯原で会つことはもうなかつた。

久しぶりに昔の夢を見た。

もしかして昨日あの湿原で人を見かけたからかもしれない。
あの少年は今どうしているんだろう。

「なんだか騒がしい?」

朝からこんなに騒がしいのは珍しいと思いつつ廊下を歩いていた。
応接間の方からだからお客様でも来ているのだろうか。
兄たちがなにやら難しい表情で中の様子を見ている。

「お兄様たち、一体どうしたの?」

「ラヴィー! ?」

「部屋から出るなって伝えさせたの忘れてたーー。」

声をかけると物凄く驚いた顔で見られた。

部屋から出るなって一体どんなお客様が来ているの?
考えていたら応接間から転げそうな勢いで誰かが出てきた。

「お初にお目にかかります、ラヴィー・グラス様。私はアラルガント
帝国で宰相を務めております、クロエと申します。どうか私の話を
聞いていただけないでしょうか」

「え、は、はあ」

とりあえず応接間の方へと戻り説明とやらを聞くことになった。
こちから説明を受けてやっと理解することができた。

「えっと、それでは陛下の前でも平静を保つていられる相手を探していってあたしに辿り着いたと」

「はい、そうなんです」

「皇帝陛下は普段から仮面をされてらっしゃるんですね？ 仮面をつけていらしたら他の皆さまも大丈夫なんですよね？ でしたら別にそんな方を探されなくてもいいと思うのですが・・・」

「一日中、眠るときまで仮面をつけているわけではないとは思う。それでも仮面を外されることなんて滅多に無い」というのだからあたしじゃなくてもいいと思うんだけど。

「それは『尤もなご意見』なのですが、自分よりも美しい人の傍には立てませんと言わてしまいまして・・・」

「ですが貴方たちは慣れればいいとお考えなのであれば別にあたしじゃなくても構わないと思います。それにあたしが陛下の素顔を拝見して、平静を保つていられるかどうかなんて誰にも分かりませんよね？ 万人が万人、そうなるのでしたらあたしも同じだとお考えにはなりませんでしたか」

理解は出来たけど納得は出来なかつた。

いきなりそんな理由で皇帝陛下の嫁になつてほしいと言われたつて困る。

陛下の前で平静を保てて世継ぎを生む人が欲しいだけであたしじゃなくてもいいはずだから。

「ち、違うんです！ 名田上はそういう理由で訪れたのですが、別の意味もあるんです！」

何故この人はこんなにも必死になつているのだろう。

あと壁に寄り掛かるよつにしているフードの人も物凄く気になる。

「今では皇帝陛下として人々の前に立ち手腕を発揮されてはおりますが、幼い頃の陛下は引っ込み思案で今とは間逆な感じでした。それをえてぐださつたという思い出の人も探ししているんです。もし見つからないのであれば諦めて一生独身を貫き通すなんて言われるから！ お願いします、ラヴィ様。お試しでも何でも構いませんのでどうかどうか一度、帝都までお越しください」

なんだか若干哀れに思えてきた。

土下座しそうな勢いのクロエ様に兄たちの方をチラッと見ればため息をついた。

「ラヴィは優し過ぎるよ」

「それがいいところなんだがな・・・」

「いいよ。ラヴィが決めたのなら、行つておいで」

「へりと頷くとクロエ様に視線を戻した。

「お試しへいことで一度帝都までお伺いさせていただきます。もし無理だと判断された場合はすぐに戻つてきますから」

「本当ですか！？ ありがとござりますー。」

飛んでこきそうな勢いのクロエ様とフードの人を見送るべく玄関まで出た。

「帝都に来る日程が決まり次第知らせてくれ」

「分かりました」

「それではラヴィ様、帝都でお待ちしております」

深々と頭を下げて去つていった。

これは大変なことになつたものだと他人事で考えていた。
だつて自分が陛下の思い出の人である可能性はゼロだと思つていたのだから。

想い出の中のあなた（後書き）

とこりわけで帝都に旅立つことになりました。どう考へても（『』）必死な宰相クロエを物凄く哀れに思つたらし。

これ帝都へ向けて（前書き）

き、気付けばお気に入り登録数が100件越え・・・・！？信じられない気持ちでいっぱいです。こんなに多くの方に読んで気に入つていただけるとは思つてもいませんでした。中途半端なお話の欠片がたくさんありすぎて危力が分散気味ですが頑張りたと思います。

こそ帝都へ向けて

その報せが両親に伝えられたかと思つと飛んで帰ってきた。

「ラヴィ、本当に行くのか？」

「もしかしたら面倒」とに巻き込まれて帰つてこられなくなるかも
しれないのよ？」

「分かつて。でも凄く困つてゐみたいだつたから……」

そう、未だに他人事のように考えていた。
帝都に行くのは自分だと言つのに。

「大丈夫よ。きつとすぐに帰つてこられるから」

一応日程を知らせて帰つてきた返事には客人として迎えると書いて
あつた。

お試しのようなものだから荷物は最低限のものしか持つていかな
い。

出発は明後日の早朝。

ここから帝都までは約三日かかる。

「氣をつけるんだぞ、ラヴィ。知らない人には絶対についていつ
やいけないぞ」

「そこまで子供じゃないから」

バタバタと準備をしている間にあつといつ間に帝都に旅立つ日が
来てしまつた。

「それじゃあ行つてきます」

「道中、気をつけるんだよ」

「アルバート、ラヴィをお願いね」

「ああ」

護衛と言つた感じで一番上のアル兄様が帝都まで着いてくれる。

退屈しないように読書用の本を何冊か持つた。

一冊目を半分まで読み終わる頃に日が暮れてきて一つ目の町に泊まることになった。

「皇帝陛下の思い出の人、か」

宿屋の一階で夕食をとつているとアル兄様が思い出したように零した。

「そういえばそんな」と言つてたけど……どうしてその人を探さないのかな

「たぶん陛下自身も素性を知らない」とじやないか?」

「うちはそんな大層な位ではない。

それほどまでに切羽詰つていたと言つ」とへ。

「よく分からないわ。」

「そうだな」

夕食を終えて割り当てられたひとり部屋へと戻つてきた。

帝都は一体どういう場所なのだろう。

皇帝陛下というのは一体どんなかたなのだろう。

不安はたくさんあるけれど頑張らなくていけや。

「お月様……」

夜空に輝く大きな月を見つけてかの少年を思い出した。

「お月様はお日様の光を反射して輝く」

あれから天体に関して興味を持つて勉強するよになつた。

月は太陽光を反射して光る。

彼は自分が月だと言つたけれど、支えになつてくれる太陽を見つ
けられたのだろうか。

考えるのを辞めて早々に眠りについた。

明日も帝都にむけての長旅になる。

休めるときにゆっくりと休まなければ。

持つてきていた本を全て読み終わる頃には帝都へと到着していた。
少し見回ることにして兄と歩き回る。

こんなにも広く賑やかなさすがに都會と言つた感じ。

「やっぱり全然違うね」

「ああ。住み慣れた場所の方がずっといいと思つけどな」

帝都へと無事に到着したことを両親と残つた兄たちへ文を書いて
送つた。

これから少しの間お世話になることであらうお城を見上げてため

息をついたのだった。

皇帝陛下といつ人（前書き）

お気に入り登録件数200越え&評価ありがとうございます♪
つともっと移り気ながら頑張っていきたいと思います!!

連絡を受けてかクロエ様が出迎えてくれた。

「この度は急な申しだったにもかかわらず遠くから足を運びい

ただき感謝いたします、ラヴィ様」

「しばらくの間、お世話になります」

いつまでになるかは陛下が決めることだらう。

ここでアル兄様とはお別れ。

「ラヴィをよろしくお願ひします」

「はい。確かに預かりました」

優しく頭を撫でると残憾しそうに手が離れた。

「ラヴィ、体調管理には気をつけるんだぞ。何かあつたらいつでも手紙をよこしていいから」

「ありがとうございます、アル兄様」

クロエ様の後に続いて城内へと足を踏み入れた。

まず最初に今日から過ごすことになる部屋へと案内された。

「ラヴィ様は大事なお客様ですので万が一のことを考え侍女と警護がふたりずつ付きます。なにかありましたら侍女たちに言いつけてください」

部屋の中で待っていたのはあたしよりも少し上くらいの綺麗な女性がふたり。

家では何でも自分でしていたので慣れていないんだけど大丈夫かな。

「ラヴィ様のお世話を仰せつかりましたマーガレットと言います」「同じくシリビアです。これからどうぞよろしくお願ひします」

血口紹介のあとに深々と頭を下げられて困惑してしまった。

「ラヴィ・グラスと言います。しばらへの間お世話になります。どうぞよろしくお願ひします」

自分の名を名乗ったあとに同じように頭を下げると微笑んだ。とても困惑したような表情のクロエ様と口元を押さえて横を向いているマーガレットさんたちがいた。

「あ、あの・・・・・？」

「ラヴィ様、この部屋に滞在されているときはこの部屋の主は貴方です。ですから侍女たちに頭を下げる必要はありません」「そういうわけにはいきません。これからお世話になるんですよ? 物事は最初が肝心なんです」

もしかして兄たちが過保護なので少し誤解されたのかもしれません。

礼儀作法に関しては幼い頃から厳しくしつけられてきた。

「そうですね、クロエ様。なにごとも第一印象が肝心ですわー！」

シリビアさんが反論したのにクロエ様がため息をつかれた。

「長旅でお疲れになられているでしょう。陛下にお会いできるのは
早くて今日の夕方ぐらいになりそうですのでそれまでばいじゅつくり
お休みになつてください」

「はい。分かりました」

果たして皇帝陛下とはどういった人なのか。

クロエ様が部屋を出て行かれてから聞いかけてみた。

「陛下はどのようの方なんですか?」

「とても凜々しいお方です。公務にはとても熱心ですし城内のもの
の話だけではなく民たちの声にもよく耳を傾けられているお優しい
方です」

それでもその美貌ゆえに仮面をつけなければ仕事にならない。

なんだかそれがとても淋しく感じたのはあたしだけなのだろうか。
仮面をつけて周りと距離を置いて・・・。

「陛下の思い出の人のお話は誰でも知っていることなんですか?」
「知らないものはいないと思います」

「幼い頃の陛下は人の前に立つて政治を進められるかどうかも不安
になるほどとても引っ込み思案で大人しい方だったそうです。そ
の頃も女子と見間違われるほどの容姿をお持ちで、王位目当てで性
別を偽られているのではないかと陛下とスザンヌ様がお疑われにな
つたこともあるそうですから・・・それは事実無根でしたが。
そんな陛下を変えてくださったのがその思い出の方なのだそうです」

あたしは何も知らなかつた、陛下は凄く苦労されてきた人なのだ
と。

「本当に女性が傍に寄ることは出来ないんですか？」

「はい。仮面を被っていても雰囲気だけで駄目な方、声を聞くだけで駄目な方もいらっしゃいます」

ならば誰が陛下の身の回りのお世話をしているのかな。

なんだかとても不安になつてきた。

例え陛下にお会いしてあたしが大丈夫だつたとしても陛下が探されているのは思い出の人。

「ですがラヴィ様でしたらきっと大丈夫だと思ひます」

「ラヴィ様も陛下に負けないぐらいの魅力をお持ちですもの」

そう言われても自分にはなにがなんだか分からぬ。

分からなくて首を傾げていたら優しい頬笑みを向けられた。

「陛下にお会いになる夕方まではお時間がありますからゆっくりお休みになつてください。今紅茶の準備をしてまいります」「すみません」

部屋に残されて一息つく。

やはり生家にいるよりもずっと緊張してしまつ。

陛下との対面まであと少しだと思つほどに苦しくなる。

ちょっと可哀想に思えて了承したけれど、本当にあたしはここに来ても良かったのだろうか。

皇帝陛下といつ人（後書き）

侍女さんの視点からみるヒロインとか書けたら面白いかなーと思つてます。

一瞬にしてヒロインは侍女たちのハートを掴みました。ヒロインの持つ魅力とは一体なんなんでしょうね。

夕方までゆっくりと休むことが出来た。
マーガレットさんたちが帝都のこと話をしてくれたりと勉強にもなつた。

「さあ、ラヴィ様。陛下にお会いになられる前に着替へましょうか」「その前に湯浴みですわね」

遠慮しようとしたが、お風呂場に連れて行かれた。

「いいからほひとつて大丈夫です……」

同じ女性でも自分よりも綺麗な人たちに見られるのは恥ずかしい。

「わづですか。ではお上がりになられましたらお知らせください」

とても残念そうな表情でふたりは脱衣所から出て行つた。
手短に済ませようと浴室へと足を踏み入れた。
さすがにお城の浴槽と感じでとつても広い。
上がりて着替えを終えるとふたりに声をかけた。

「もう完全に着替えられちゃつてるじゃないですかあ

また残念そうな表情で言われてしまった。
そこになにか問題もあるんですかー??

「大体自分で出来る」とは自分でしてきたので手を借りるところには慣れていないんです」

「いいえ、慣れていただかなければ困りますわ、ラヴィ様」

力説されるけれど侍女がつぶんてここに滞在している間だけなんだけど。

「でもまだ私たちには役割があるわ。そつ。ラヴィ様をさせか・・・
・・・着飾る」と――

明らかに言い換えたなにかは聞かなかつたことにした。
部屋に戻つたあと、ふたりに凄く楽しそうにお化粧されたり着せ
替えられたりしてすでにぐつたり。

「いい出来栄えですわ。大変満足です」
「これなら陛下でさえも目を奪われるはず!」

クロエ様が迎えに来られて後をついていく。
どこに向かつているのかは分からなかつたけれどたぶんお城の奥?
てつくり謁見の間とかで会うのかと思つていた。

「こちらで少しお待ちください」
「あ、はい」

庭園、だらうか。

四季を彩る綺麗な花々がたくさん咲いているし手入れも行き届いている。

その花を見ながら少し歩いていると見慣れた花を見つけた。

「 」の花・・・・・ 湿原に咲いてるのと同じ

思い出の場所である湿原に同じような花が咲いている。
あの花はけつ こう有名なものなのかな。

「 気に入ったか」

突然声をかけられて勢いよく振り返った。

「えっと・・・・・・」

きらきらと輝く銀髪は誰かを思い出させる。
仮面をしてる」とこ 気付いてすぐに皇帝陛下だと分かった。
失礼のないようすすぐ元頭を下げた。

「 手入れも行き届いていてとても、綺麗だと思います」

「 そうか」

仮面の下で少し笑つたような気がした。

はつとして自分が名乗つていなことを思つ出した。

「 ラヴィ・グラスといいます。しばらぐの間 じかうでお世話になる
ことになりました」
「 顔をあげてくれ」

そつと肩に置かれた手に驚いたけど恐る恐る顔をあげた。

「 広大な自然に囲まれたノリツから来たのだから。帝都はどうだ」
「 都会、と言つた感じです。ノリツよりも広くて賑やかで」
「 そうか。ここには馴染めそうか?」

「へりと頷くと周りの雰囲気が穏やかになった。
ああ、まるでこの方の機嫌を表しているかのよつ。

「陛下、ラヴィ様。」ちりべじわ

クロエ様に呼ばれて行くとお茶の用意がされていた。
もしかしてクロエ様が用意されたのだろうか。
向かい合つようになつて座るといつてお話をした。
帝都のことじだつたりノリシのことじだつたり。

「明日、クロエに城内を案内してもらひつと良い。頼めるか
かし」まつました

そろそろタイムリミットのよつで陛下に一礼してからクロエ様と共にその場を後にしようとして足を止めた。

「どうされましたか」

「いえ・・・・・」

名前を、呼ばれた気がしたのだけど氣のせいだつたかな。
先程来た道を戻りながらクロエ様はどこか満足げな表情だつた。

「それにしても安心しました。やはりラヴィ様を帝都にお呼びして
よかつたと思ひます」

「ですが・・・・・陛下が探されているのはやの、思ひ出のかた、
なんですよね？ あたしがここに来て本当に良かったのでしょうか

もう言つてクロエ様は少し慌てたような表情へと変わつた。

「だ、大丈夫です！ とにかく貴方でなければ困るといつか……」

「え？」

「あ、い、いえ。 明日の城内のご案内ですがいつ頃にいたしましたようか？」

なにやらみんなして言葉を濁すことが多かった。

「あたしはいつでも大丈夫です。クロエ様のお時間のあるときで構いません」

「そうですか、分かりました」

部屋の前まで着くと軽く頭を下げた。

「送つてくださいありがとうございました」

「いえ。それでは私はこれで失礼します。じゅつくりお休みください」

室内に入るとすぐに化粧を落として寝巻きに着替えてベッドにはいった。

いろいろあつて疲れていたのかすぐに眠りについた。

皇帝陛下という人は思っていたよりも表情が豊かな人だった。表情と言つても仮面の下でほほ見ることはできないがまとつている雰囲気の変化を読んだと言つた。

「どのくらい、ここに滞在することになるのか。」

「これからどうすればいいのか不安はたくさんあつたけどみんな優しい人ばかりできつと頑張れる気がした。」

陛下との顔合わせ（後書き）

PV30000アクセス、ユニーク10000人近くで本当にびっくりしています。

なんだろう、物凄く頑張らなきゃ！

兄たちの想いや？（前書き）

兄たちの想いや少しばかり割り込み投稿をさせていただきました。

誤字修正しました。ご報告ありがとうございます！

兄たちの思いやの？

ラヴィイが帝都に旅立つてからとこりもの考えるのはラヴィイの」とだけ。

今はどりじているか、城での生活はどうだろつかなじ。

四兄弟の末っ子にして唯一の女子であるラヴィイの誕生は両親だけではなく自分たちもとても喜んだ。

両親が仕事で遠くにいるので面倒を見るのは兄である俺たちと少しの使用人たち。

歳も離れていたせいか思いつきり甘やかして育てた。
過保護と言わてもしかたないぐらいラヴィイは可愛い。

「ラヴィイ、大丈夫かな」

「なにかあつてもきっと誰にも言わずに耐えてしまつから余計に心配だ」

皇帝陛下の皇妃候補なんていう降つて湧いた話をもちろん俺たちは拒否した。

例え皇帝陛下だらうとなんだらうとそんな様々な思惑の渦巻く場所になどやりたくなかった。

まさか妹のいるであらう朝の時間帯にまた訪れるなどとは思つていなかつた。

あの時にしつかりと密が帰るまで部屋から出るなとこりことを伝えていたら、今は違つていたかもしれない。

だがそれはもう後の祭りでラヴィイはここにこない。

「ラヴィのことだ、向こうでも無意識に味方を増やしているだろう。その中に信頼のにおける人間がいればいいな」

周りを元気付けるほど明るくて誰にでも優しい自慢の愛妹。

その笑顔は初対面の人間でさえ簡単におとをしてしまうほど魅力的で愛らしい。が、本人にその自覚はない。

そんなラヴィに何故今まで縁談などが浮かび上がらなかつたといふと俺たちががつちりガードしていたからだ。

「ずーっと僕たちが護つてきたのに」

「そろそろそういう話が来ても可笑しくはない年齢になつたのは分かつてたんだけどなあ」

はああつと重いため息をつく。

「いざれは嫁に行つてしまつだらうとこいつ思ひはあつたが選ぶのなら近場の人間にしたいと望んでいた。

そうすればいつだつて会いにいけるし帰つてこれる。

「ラヴィにとつて今までノリツが中心だつた。帝都はここよりも広くて便利だ。だが・・・・あの子が頷くと思うか?」

「思えないかな。しかもあの文言だし、ラヴィは一度断つたようなものだ」

「つていうか怪しかつたよな・・・・」

やはりそう思つていたのは俺だけじゃなかつたようだ。

突然の訪問からあの文言まで。怪しいことこの上なかつた。

理由は、なぜ帝都から離れたノリツにわざわざ皇妃候補を探しに来るので。しかもピンポイントで家に。

「一国の若き宰相が出てくるつてことはそれだけ切羽詰つていたつことは伺える。けど、明らかにおかしいよね。ラヴィが言ったとおり、慣れればいいのだと考えているのなら、なにもノリツまで来なくたつていい。もつと近場にいくらでもいるはずだ」

「とつてつけたように思い出の人の話が出たつけな。あれも本當だと思えるか？ ラヴィの同情を引くための嘘だとしたら俺は宰相も皇帝も許さない」

その思い出の人に関する詳しい話は聞かなかつたが帝都で情報を探れば出るか？

「その辺は探つてみるとしよう。どんな理由にせよ、ラヴィが戻つてきたときに優しく迎え入れよう。それが家族としての俺たちの役目だ」

「そうだね」

「ああ

少し落ち着いたあたりに手紙を出して近況を聞くか。無理をしていなけばいいが・・・。

#もるで発世界（前書き）

呆れるほど一話一話が短めですみません。これで区切つて良いのか分からなくなると困つか……；

早くに田が覚めてしまつて持つてきいていた本を読み返していた。するとノックをする音がして返事をするとシルビアさんがはいつてきた。

「まあ、ラヴィ様は早起きですね」

「田が覚めてしまつて……」

昨日はぐつすつと眠れたために寝起きも良かつたのだ。

「そうでしたか。せつかくラヴィ様の寝顔を拝見できると思つたのですが……残念です」

まさかそんなことを言われるとは思つていなかつた。寝顔を見て何か良いことでもあるのかな。

「今日はクロ工様に城内を案内していただきんですね」「はい。とても広くて迷つてしまわなかつて凄く不安ですけど」「きっと大丈夫ですわ」

少ししてカートを押してマーガレットさんがやつてきた。美味しい紅茶をいただきながら至れり尽くせりはこういつもののかな、と思つていた。

クロ工様から昼食後こと言つ連絡が来て少し不安な気持ちになりながら待つていた。

城内で働く人たちに私はどうこうした存在として知らされていの

か。

果然とするしかないほどお城は広かつた。

説明を聞いていはいるんだけど覚えられそうになないと詫うか。

「図書室になります。陛下から自由に入り出しても良いとい

「え、いいんですか？」

11

持つてきていった本は読み終わってしまったし時間をどう潰そうか
と思っていた。
さつそく中には入らせてもらひつとやまつ別世界。

「す、二、・、・、・、・、・、」

開いた口が塞がらない。

とても高い本棚と大量の本や書物

「中には貴重な本などもあつますので持ち出しえぬかどうかは同書にお尋ねください」

「ここで読書をしても大丈夫ですか?」

やんと引き連れてください」

そう言わると少し不安になるのですが。

「あの、あたしのことはお城で働いてる皆様はご存知なんでしょうか」

「今はまだ一部の者しか知りませんが、いざれば知られることになると思います」

その知られる由と云うのはあたしがお城を出る由?
それとも・・・・・あたしが、皇妃候補になつたとき?

「今日の城内の『】案内は】ここまでにいたしました。ラヴィ様はお部屋にお戻りになられますか?」

「少し、ここを見てもわりたいのですが・・・・」

「分かりました。では護衛のものを一人残しますので帰りの際は彼に声をかけてください」

「はい」

クロエ様と別れて図書室内を歩いてみる。

いろいろな種類ごとにきつちり分けられていて分かりやすい。

一日中ここで過ごしても良いかなとか考えていた。

手のひらな本を数冊手に取ると図書さんの元へと向かつた。

「すみません」

「ああ、貴方が・・・・クロエ殿にお話は伺つております。なにかお困りですか?」

「い、いえ! 本の持ち出しをしたいのですが・・・・」

話をしてみると図書さんはとりあえず優しい人だと思つた。

「お帰りはお気をつけて」

「ありがとうございます」

頭を軽く下げてから微笑むと残つてくれていた護衛の人と共に図書室を後にした。

「あの子が陛下のか。お似合いじゃないか。ああ、生きていらぬうちにあの内気皇子の嫁が見られるとはなあ」

司書がそんなことを零してこぬなんてラヴィは知る由もなく。

部屋に戻ってきてからはずっと本を読んでいた。

やつぱりこの時間が一番落ち着ける。

改めて自分が暮らしてきた環境との違いに驚かされた。

「どうかあたしこれからどうあるの……？」

陛下とはあつたけどこれからどうなるとかなにも分からぬ。ああでも、初めて会つたような気がしなかつた。

何処かであつたことのあるような雰囲気。

相手は皇帝陛下だしあたしはノリツから出たことほとんど無い。ならば一体どうや……？

「失礼いたします。」

ノックの音に返事をするとマーガレットさんがはいつてきた。

「ラヴィ様にお手紙が届いておいでです」

「ありがとうございます」

受け取つてみると兄からだつた。

こちらでの生活に關してとか不満はないかとか。

兄たちは末っ子のあたしを可愛がってくれるのは嬉しいけど少し過保護なところがある。

さつそく返事を書くことにした。

不満も困つていることもないしみんな優しくて良い人たちばかりです、と。

まるで異世界（後書き）

勘のいいかたはすでに気付かれているかもしれません。
そうですが、ラヴィが陛下に会つのは初めてではありません。

綺麗な華には棘がある（前書き）

PV60,000、ニューヨーク20,000人ありがとうございます
^ ^

綺麗な華には棘がある

お城に滞在を初めて早数週間。

図書室に本を返して新しいのを借りに行こうとしたら綺麗な人と出くわしました。

なんだかとつても不機嫌そうです。

あたし、初対面ですがなにかしましたか。

「・・・・・貴方がわざわざ田舎から来たといつ皇妃候補の方ね」

えつともしかしてどこかの貴族のお嬢さんでしょうか。

あたしのことは一体どこから漏れたのですか。

「一体どんなことをななさったのかしら。貴方のような方があの方の隣に立てるとしても思つているの?」

一応お試しとこいつとでここに居るんだけどそれを言つたりもつと機嫌を損ねてしまふやう。

「どうせこずれ尻尾を出すでしょう。そのときが楽しみだわ」

なにも言わなかつたことも機嫌を損ねてしまつたらしくて捨て台詞と取れる台詞を残してその人は去つていつた。

クロト様こいつこいつのは計算のつちなのでしょうかー?

「ラヴィ様がお気になれる必要はありませんわ」

「その通りです。くれぐれもおひとりで行動なさるよつなことな

れないよつに

「はあ」

シルビアさんと護衛についてくれて、シトラスさんの言葉にまいに頷いた。

ひとりで動くなんてとんでもない！

絶対に迷子になつてしまつから。

「おはよひ、ロジトさん、ロジトさん、

図書室に来ると図書のロジトさんに挨拶する。

「おはよひ、ラヴィちゃん」

ロジトさんに最初の頃みたいな敬語をやめてもらつた。

何度も図書室で会つて、し本当は敬語を使われるような立場じゃないからつて。

図書室で本を探しているとさつきの人とはまた違つて、綺麗な人が現れた。

もしかしてさつきと同パターンでしょうか。

「貴方、じ自分が思つて、いるほど立つて、いるといつことを知らないんですね。貴方の正体は上の方々しか知らないとも、護衛を引き連れて、いるぐらいだからけつ、こんな噂になつて、いますのよ

そうですよね。

それは実はあたし自身も思つて、いたことだつた。

「勘違いしないで、いただきたいのですが、あたしは、皇妃候補としてここに来たわけではありません」

「ええ、お話は伺つておりますから知つておりますわ。貴方、陛下のお顔は拝見されたかしら？」

「いいえ」

一番重要な素顔の陛下とは一度も会つていません。

「「」の帝都に住む貴族の娘たちは幼い頃からあの方の隣に立つに相応しい人物になれと言われて育てられてきましたわ。上層部の人たちは慣れればよいとお考えのようだけれど、慣れるなど到底無理な話ですね。クロエ様のように最初から耐性でもない限り一生添い遂げるなど、ましてや思い出の方しかいらないと言われるあの方の隣に立つなど無理に決まっています」

「」の方は一体何を言われたいのでしょうか。

ひとつだけ分かつたのはクロエ様は最初から陛下の素顔を見ても大丈夫だったという「」。

「誰でも自分を見て欲しいと思つのは当然のことですわ。それにあの方は皇帝陛下といつこの国の頂点に立たれているお方。寵を受けたいと思う人間は腐るほどいます。そんな中で過ごすのが無理だと思うのなら早くお帰りになられるべきだわ」

遠まわしだけど先程あつた方と同じことを言いたかったみたい。要はあたしなんかが隣に立てるような人じゃないからさつさと帰れど。

「「」忠告あつがとう「」ぞこます」

たぶん本人にそんなつもりはないと思つけれど、と頭を下げた。

「ノリツからほどんど出たことのないあたしが陛下の思い出の人であるはずがありません。ですから近いところに帰ることになると想います」

やうやく驚いたような表情をされた。

「貴方、なにも聞いていないんですの？」「なにがですか？」

「聞いていないことの方が多こと思つたですけど。

「……………いえ、なんでもありませんわ」

なにやら考え込んでしまつたこの方を放つておくわけにもいかず。とりあえず黙つてそのまま立つていた。

「わたくしはアイリス・ヴァンデイツと申します。貴方のお名前は？」

「え、あ、えつと、ラヴィ・グラスと言います」

聞かれたので答えたけど答えてもよかつたんだよね？

「また、お会いすることがあるかもしれませんわ。くれぐれもお気をつけになられて。貴方の存在は嵐の田になりそつですもの」

「は、はい」

そう言つてアイリスさんはいなくなつてしまつた。首を傾げながら本を借りて部屋へと戻つてきた。

「あの、シルビアさん。」

「なんでしょうか、ラヴィ様」

「図書室に行く前にあつたあの方はどなたなんですか？」

聞くとともに困ったような表情をされてしまった。

あたしはなにか言いづらいことでも聞いてしまっただらうか。

「あの方はオンドバル伯爵様の『令嬢でカルティナ様です。』自分が陛下の皇妃候補から外されたことをとても根に持つておられて、同じような貴族の『令嬢を苛められていた』という噂もあります。ラヴィ様、の方ともしあ会にされたら十分気をつけてください」

アイリスさんと同じことを言われてしまった。

生まれたときから陛下の隣に立つに相応しい人物になれといわれて育つってきたのに陛下には思い出の人がいる。
ぱっと出の人間を気にいるはずがない。

「ラヴィ様、絶対におひとりになるようなことはしないでください。陛下があ選びになられたのは貴方なのですから。そうですわ」

何かを思いついたようにシルビアさんはぽんと手を叩いた。

「明日の『』予定はこの前と同じ時間に陛下とのお茶会がありますが、それまでは予定がありませんからもしよろしければ私どもの仕事場を見学なさいませんか？ 私の仲間たちもラヴィ様にお会いしてみたいと言つておつましたから…」

力説されて頷くと嬉しそうに微笑んだ。

陛下とは時間のあるときにお茶会することになつていた。

それも知られたらきっともつといろいろ言われてしまうのだらう

か。
でも言われても仕方ないような不安定な位置にあたしは立つてい
る。

笑顔の魅力（前書き）

お気に入り登録500件、PV9万越えありがとうございます！
ご指摘ありがとうございます！訂正させていただきました・・・！

笑顔の魅力

シルビアさんとマーガレットさんと共におふたりの仕事場の見学へときていた。

「今日ラヴィ様をお連れすると申し上げたらみな喜んでおりましたわ」

「どうしてですか?」

「私たちがいろいろとお話をするのでラヴィ様にとても興味をお持ちなんですね」

少しへきりしながらついていく。

「では、参りますか」

「ええ」

ふたりが扉の取っ手を掴むと勢いよく同時に開いた。中にいた人たちが呆然とした様子で止まっていた。

「うふふふふ」

「約束の通りラヴィ様をお連れしたわよ?」

悪戯が成功したとでも言ひよつに楽しそうに一人は笑っている。果然としていた侍女さんたちは言葉を理解するや否や詰め寄つてきた。

「マーガレットとシルビアからお話は伺つておつました!」「お会いできて光榮です!!」

「えっと、あの・・・・・ラヴィ・グラスと言います。はじめまして？」

僅かに首を傾げながら微笑むと黄色い歓声があがつた。

何故・・・・?

「ラヴィ様の最大の武器はその笑顔ですから」

「ええ。ラヴィ様の笑顔は最強です。その笑顔を失わせないようには私は尽力させていただきます」

一人の言葉にまたもや首を傾げるしかなかつた。

一気に慌しくなつた室内に申し訳ないけど促されて席に座つた。

「ふたりに聞いていた通り、本当に愛らしくて抱き締めてしまつた

くなります！」

「お肌も艶々だし髪もさらさらしていらっしゃるし・・・・・」

なんだか人形になつた気分です。

一通り触られたあとはみんなからいろいろと質問責めにされた。

「ラヴィ様は」」兄弟などはいらっしゃるのですか？」

「兄が三人います」

「まあ、お兄様が三人も？ でしたらラヴィ様はとても可愛がられたのでしょうかね」

可愛がられたといふか過保護と言つていいほどだった。

「ですがラヴィ様のような愛らしい方が妹だったらきっと私もそつとなつていたかもしねないわ」

「社交界などにはお出になられなかつたのですか？」

少し回想してみてから「くつと頷いた。

「兄たちが出席するときしか出たことはありません。出てもあまり踊つたり話の輪に加わつたりはできなかつたので」「男性からお声をかけられたこともないのですか?」「はい。常に兄が傍にいましたから」「お兄様方がラヴィ様をお嫁に出したくなかったという気持ちがよく分かりますわね」

でもあたしにつきつりなせいで兄たちにも良い人が見つからなくて。

もしかしてあたしが知らないだけでお兄様たちにもちゃんとした人がいるのかな。

それなら紹介してくれても良いのに。いい関係を気付けるかどうか分からぬじやない。

「なにか困つたことなどがありましたら」遠慮せずにお申し付けください!」「

「私たちはラヴィ様の味方ですから」

「あ、ありがとうございます!」

けつこう長居をしてしまつたので仕事の邪魔にならなかつただらうか。

途中で何人かが名残惜しそうに仕事へとむかつていつたけれど。お昼になる前に自室へと戻つてきた。

「どうでしたか? ラヴィ様。」

「とても楽しかつたです。みなさん良い人ばかりで」

「それはよろしかつたですわ。そうでしたわ。ラヴィ様は大事なお

客様ですから私どもに敬語を使う必要はありません

「うは言われてもあたしことつたら彼女たちは田上の人だ。

「お話しやすい口調で全然構いません。そのほうがラヴィ様と打ち解けられたという実感も湧きますから」

「分かりました。あの、でも、敬称はこのままでも構いませんよね・
・・・？」

「ラヴィ様にお任せいたします」

敬称はそのままにして口調を普通どおり。

あ、でも陛下やクロエ様の前ではちゃんと今までどおり接する。
そう心に言い聞かせた。

間違えてしまつたらとんでもないことになつてしまふそうだ。

お皿を済ませると夕方まで刺繡していた。

「このお花は見たことがありませんが、なんとこのお花なのですか
？」

「ノリッジの近くに大きな湿原があつてそこに咲いている花なの

時期が来ると湿原にはこの花が咲き誇る。

その時期に観光に来る人たちが一番多いのだ。

それはそれは見事なもので毎年来ている人もいるぐらいなのだ。

「名前はなんだつたかしら。一度教えてもらつたんだけど・・・・・

・」

庭園に同じ花が咲いていたけれど陛下は知つてゐるかな。

「もうこんな時間ですわー。ラヴィ様、急いで」支度なさらないと
「え、うん」

前回と同じパターンでなんとか湯浴みはひとりでいいと説得して。
着せ替えられて綺麗にお化粧されて準備が終わった。

「久方ぶりだな」
「はい。お久しぶりです」

このお茶会以外で陛下と会つたことは一度もない。
それほどお忙しい方なのだろう。

「今日は庭園の散策でもするか」
「いいんですか？」
「ああ」

陛下の一・三歩後ろを歩いてついていく。
恐れ多くて隣を歩くなんて出来るはずがない。
そしてあの湿原に咲いているのと同じ花の前までやつてきた。

「ノリツの近くに大きな湿原があるのはご存知ですか？ この花は
その湿原に群生している花と同じ種類みたいです。 春の終わりご
ろから夏の初めにかけて綺麗な花を咲かせるのでその時期に観光に
来られる方がとても多く、毎年見に来られる方がいるぐらい凄く綺
麗なんです。 ですが、夏の終わりごろの夜に湿原に足を運ぶ人も
多いんです」

「それはなぜだ？」

「水の水質が良くてとても綺麗なので蛍がやつてくるんです。お月様の光がないときは蛍の僅かな明かりだけなのでとっても幻想的なんですよ」

その光景を思い浮かべてふふっと笑う。

よく兄たちと共に湿原へとわざわざ足を運んでは見とれていた。

「蛍か・・・・・見たことがないな」

「でしたら機会がありましたら是非お訪ねください。そのときは」案内させていただきます」

微笑みながりそういふと僅かに陛下の雰囲気が揺らいだのを感じた。

伸びされた手が髪に触れると何度も頭を撫でられた。

「その笑顔を見ていると心が安らぐ」

「・・・・・？」

「お前は太陽のようだ」

その言葉にどきりとした。

湿原で出会つた少年に言われたのと同じ台詞。

「同じことを昔湿原で出会つた男の子に言われたことがあります。彼は自分を月だと言つていました。月はひとりで光ることは出来ないから自分にぴつたりだと。月は太陽光を反射して光りますよね？太陽がいなければ月は光ることが出来ません。会つたのはその一回きりなのですが、たまに思い出すんです。彼は支えになつてくれる太陽を見つけられたのでしょうか・・・・・」

とても悲しそうな瞳をした人だつた。
自分を月だと称したあの人を支えてくれる太陽にどうか出会えて
いますよ!」。

「 もひ、見つけている」

陛下がぽつりと零した言葉は聞き取ることが出来なかつた。

笑顔の魅力（後書き）

とこうわけで他の侍女の方々との対面。ラヴィは兄たちに護られていたので自分の魅力と言つもの理解していません。

天然て怖いですね！

自分が戻ることを前提で話しているラヴィに陛下は思いつきり動搖しています。

ここからふたりの距離を縮めていくようなエピソードを……。

エピソード、ドーン
ええつと、もしよろしければ感想や誤字・脱字のお指摘などいただけましたら嬉しいです、なんて。

どうしてか眠れなくて部屋を出て近くのテラスまで来ていた。わずかに灯る街の明かりにノリツが懐かしくなってきた。まだこっちに来てそんなに経っていないしまだどうなるかは分からぬ。

「そこにいるのは誰だ？」

声がしてびっくりして勢いよく振り返る。

立っていたのは先程会った時よりもラフな感じの衣装をまとった陸下だった。

「あ、あの・・・」

「ラヴィカ？」

突然名前で呼ばれて頬が熱くなるのを感じた。

「は、い」

お茶会以外の、それも夜の時間帯に会うのは初めてで緊張からか胸が高鳴る。

傍まで歩み寄ってきた陸下に頭を下げようとしたら制された。

「周りに咎めるものはいないから必要ない」

「何を話せばいいのだろう。」

困惑氣味に空を見上げていたら月が見えた。

「確かに陛下のお名前にあるチャンドラはとある地方では月を指す言葉なのですよね？」

「ああ。よく知っているな」

「天文学を勉強していたことがあってそのときに知ったんです。あたしの名前もその地方では太陽を指すときに使われる言葉のひとつなのだそうですね」

セウヒ少し驚いたような様子が見て取れた。

「これも運命か。まさか月と太陽が出会うとは」

本来であれば追いかけっこをしているふたつが出会うことはない。たまに日食や月食という現象が起きるけど。

「ラヴィは勉強熱心だな。図書室にも良く足を運んでいると聞いた」「本を読むことが大好きだけです。得られる知識は本によつてまたたく違います。あたしは自分の興味のあるものを読んでいるので偏りてしまつていますけど……」

とても穏やかな時間が流れしていく居心地が良いと思つてしまつ。

「本当に小さい頃はあまり外に出ることが出来なくて、本でも読んでいないと時間を潰せなかつたんです。外で遊ぶことで得られることが多すぎますけど、本から得られる」とも同じくらくなっていますよね」

本当に小さな頃は病弱で外に出ることも出来ず、こすつと本ばかりを読んでいた。

それも一時のもので少しずつ外に出られる時間も増えていき今は心配は要らないと言われている。

だから思いつきつ外に出られるようになつたときあたしは馬に乗
りたいとワガママを言った。

ずっと兄たちを見て憧れていたから。

「時期を見て遠乗りにでも行くか

「ふえ？」

考え事をしていたせいで気の抜けたような返事をしてしまいハッ
として口を手で塞いだ。

陛下は笑うのを堪えるような感じで口元に手を当てている。
笑いが収まつたのか口元から手を外して再度問いかけてきた。

「今度、遠乗りにでも行くか

「いいんですか？」

「ああ。ずっと城の中で過ぐるのは退屈だらう

そういうえばあたしが乗馬することは知られていたんだつた。

「はい、楽しみにしています」

ふつと皿の端を星が流れていいくのが見えた。

空を見上げたときにはもう消えていた。

「流れ星・・・・?」

「流星か」

「そういえば流れ星が消えるまでに願い事を3つ呟えると願い事が

叶うところのお話は有名ですよね。もうひとつ、違った意味のお話があるのはじご存知ですか?」

「いや、どういった話があるんだ?」

有名なのは願い事。

それともうひとつ流れ星には意味があるのではないかと言われていた。

「流れ星は誰かの命が消えようとしている象徴。とある地方ではそういう捉え方もあるのだそうです」

「どちらにせよ儂いものだな・・・・・」

空を見上げて言つ陸下の横顔はどこか切なそうだった。
ふたりで見上げた星空にまた流れ星が流れていった。
どんな願いを込めたのかは星のみぞ知る。

星に願いを（後書き）

今回、いつもより短いですー（^o^）ー

文中に出てきたとある地方といつが言語になるのでしょうか。

サンスクリット語で月をチャンドラ・ソーマと呼び、太陽をスーリヤー・アーディツテヤ・ラ・ヴィと呼びます。

ところがで陛下の本名は本文にはまだ出ておらず、アーレフ・フレッド・ウォルト・チャンドラ・アラルガントとなっています。

IRIちゃんがよく陛下はアーヴィーの名前を呼ぶことに成功しました（笑）

ちなみに流れ星のお話は中国です。

「ラヴィ様、お手紙が届いております」
「ありがとうございます」

受け取った手紙は2通あった。

ひとつは兄からでもうひとつは差出人の名前が書かれていなかつた。
不思議に思つて裏返してみると封をとめるために蠅が使われていた。

「あのマーガレットさん」
「なんでしょうか？」
「「」の家紋はどうひらのものか分かる？」

蠅に焼き付けられている家紋はあたしが見ただけで分かるはずがない。

「これは……ヴァンティッシュ公爵様のものです

確かに図書室で出会つた女性がその姓を名乗つていた。

「黙つていで」めんなさい。図書室で一度、アイリスさんという方にあつたの
「アイリス様に？ そうでしたか……」

なんだか困惑したような表情をしているんだけど。

「それでお手紙にはなんど？」

言われて封を切り、便箋を取り出した。

とても女性らしい纖細で綺麗な字で書かれていた。

「お茶会への招待状みたい」

あの時一度会つたきつたぶんあちらはあたしを良くなは思つてい

ない、と思つ。

それでもせつやくお誘いしていただいたので断るのも・・・・・。

「アイリスさんばどのような方なの？」

「アイリス様は陛下とクロエ様の幼馴染になります。そして・・・・・

・・皇妃の最有力候補であらせられました

「そう、なんですか・・・・・」

あの人があの陛下の。でも過去形つてことは今は違つてことなのが
な。

「やつぱりせつかくお誘いいたいんだし行かないのは失礼よね。
うん、行きましょう

出席のお返事を出してすぐに準備に取り掛かつてもらつた。

一応クロエ様に向つてみるとにしてクロエ様を尋ねた。

「アイリスが、ですか？」

「はい。前に一度図書室でお会いしただけなんですが・・・・・

なにせら顎に手を当てて考え込んでいたけど少ししてからひとつ、
頷いた。

「アイリスなら大丈夫でしょう。心配はいりません」「は、はい」

クロエ様は心配いらないと言われているしあまり気を張らずに頑張るつ。

冷静に、気楽に明日を乗り切ろうと決意したのだった。

そして翌日、約束していた時間より少し早く到着した。
相手を待たせるなんて言語道断、もつてのほか！と礼儀同様に教え込まれていた。

「本日はお招きいただきましてありがとうございます」

スカートの裾をわずかに持ち上げて頭を下げる。

「どうぞお座りになつてください」「失礼します」

なんだかじーっと見られている。視線が突き刺さるといつか、でも嫌な感じのするものではない。

「急にお呼び出してしまつて」「めんなわー」

「いえ、予定は特にあつませんでしたから」

少し氣まoeいながらもあたしとアイリスさんのふたりでお茶会がはじまった。

いろいろとお話を聞いたり聞かれたりしながら穏やかに時間は流れている。

「あ、あの聞いてもよろしいですか？」

「なんでしょうか」

マーガレットさんに聞いた例のことをビーヴィーでも聞きたかった。

「あの・・・」

聞いても良いことなのか分からずに言葉を濁す。
もしも断られたのならそれ相応の理由があるけれど、あたしなんかが聞いても良いものなのかな。

「おしゃりたいことは分かりますわ。わたくしがなぜ、皇妃候補を辞退したのか、ではないのですの？」

やつぱり氣付かれていたのかとこへつと頷く。

「どうして・・・お断りになられたんですか？」

「幼い頃から傍で見ておりますから陛下は兄のようなものですね。昔の変わられる前の陛下も知つておつまますし、わたくしは自分よりも美しい顔の人の隣になど立ちたくありませんもの」

あっけらんとした様子で言い放った。

確かその言葉をどこかでも聞いたことがあると思ふ返してみれば、

クロエ様と初めて会つた時に言われていた。

「そ、その言葉はアイリスさんが言られたものだっただんですね」
「わたくしも少しは耐性がありますから周りからしてみれば一番望ましかつたのでしょう。それにわたくしの母は前皇帝陛下の妹で陛下の叔母にあたります。つまりわたくしと陛下は従兄妹ですからただちようどよかつただけですわ」

家柄も身分も申し分がなく、それにとても綺麗だし陛下の素顔も見慣れているし耐性もある。

もしかしてそんな人に断られてしまつたから誰でも良かつたとか?だから慣れれば良いと思つて探し回つた結果、あたしに回つてきたと?

考え出したらきつがなかつた。ビーブしても後ろ向きに考えてしまつ。

「慣れればいいとお考えなら、あたしじゃなくとも良かつたはずですよね」

ぽつりと呟くように言葉が落ちていつた。

どうしてお城の人たちは普通に皇妃候補としてあたしを扱うのかよく、分からない。

アイリスさんが物凄く重いため息をついていた。

「

「え?」

なにやら呟かれたみたいだけなのにを言つたのかまでは聞こえなかつた。

「慣れればいいのだといつのは周りの意見にしか過ぎませんわ。本人がそう思つてはいるのでしたらわざわざノリツまで行かれるかしら？」

そう言われても思い当たる節がないのですが。

「陛下とはお会いになつてはいるんですの？」

「あ、えつと、時間のあるときにはお話をしたりお庭の散策をしたりは……」

遠乗りに行く約束も、この前夜にテラスでお会いしたときにした。

「仮面は確かに有効なのですが、なにを考えているのか分からぬともよく言われてありますわ。あまり表情が読めないでしょ、う？」
「それはそうですけど……霧囲気でなんとなく分かるので」

え？ なんだか信じられないという表情で見られてはいる。

「霧囲気で？」

確認するように問われてこくつと頷いた。

「ど、どういった感じですか？」

わざかに首を傾げながら説明する。

「えつと、嬉しそうなときは霧囲気が穏やかになつたり、困惑とうか動搖したときはたぶん霧囲気が揺らいだり？ そ、そんな感じですけど」

他の人もつまづきそんなん風に陛下の表情を読んでいるんだと思つていた。

クロエ様はなんとなく予想をつけてつて感じに見えたけど
じゃなきゃ他の皆さんはどうやって読んでるのかな。

綺麗な華再び（後書き）

あれ？ アイリスがめっちゃ核心に迫る！ と書いたの元の子氣付
いてないよー（^○^）-

ラヴィは自分が言ったとおり、お試しでここに来ていると、いずれ
はノリツに帰るのだと思っています。だから自分は皇妃候補ではな
いと言っています。なのに周りが皇妃候補として扱うこと凄く戸
惑っているのです。

どう考えてもクロエの最初の説明＆言い訳と陛下がはつきりしない
せい。

アイリスとのお茶会はもう一話ほど続きますー。

綺麗な華再び？

驚いた表情でいたかと思つとまたなにやら呟いていた。
ええつとそんなに驚かれる」とだったのでしょうか。逆に不安になつてきます。

「貴方には本当に驚かされますわ。そんな風に陛下のこと理解する人は今までおりませんでしたもの」

「そ、そつなんですか」

あまり良くなは思われていないと思つていたのはあたしの勘違い？
やう思つほど最初に会つた時のとザとザしさは感じられない。

「なにを考えているのか読ませない方が良い方々がいるのも確かです」

ええつとお仕事関係の話はされてもよく分からぬのですが。
今度、お仕事をされているところを見てみたいと言つたら許していただけるかな。

「そりクロエ様に伺つてみよ。」

「昔は外に連れ出すのはわたくしかクロエ様の役目でした。そうでもしなければ部屋に籠つてでこないんですもの」

「いか懐かしあつに」アイリスさんは幼い頃の話をしげじめた。

「本当に今とは正反対で、引っ込み思案で内気でスザンヌ様の後ろに隠れられていることが多いかったです。年の近いものは城内にはほとんどいませんでした。それで年がひとつ違いということでクロエ様がお呼ばれになつたんです。クロエ様も宰相になられてからあのような柔軟な感じになつたんですけど、前はもつとやんちゃな方でしたわ」

あのクロエ様が？ やんちゃだったなんて思えないほどの落ち着きぶりなのですが。ちなみにスザンヌ様は陛下のお母様です。若くして亡くなられると聞きました。

「本当に仲が、よきしかつたんですね」

陛下とクロエ様とアイリスさんの三人で遊んでいらっしゃる姿は思ひ浮かべられないけれど。あたしが知つているのは今の三人だから。

「ええ、そうですね」

少し表情がくもつたかのように見えた。

「みな、変わられてしまつて……変わらないのはわたくしだけですわ……」

表情に影を落としながら少し悲しそうにぽつりと零した。やはり綺麗な人はそういう憂いげな表情もさまでなつていて、でも変わらないのはいけないこと？

「変わらないのは悪いことじやなこと思こます」

変わつていくものの中で変わらないものを見つかるヒビ」かほつとした気持ちになるときがある。

悪いのは立ち止まり続ける」とで変わらないことじやない。

「・・・・・アイリスさんはあたしの「」とあまり良く思われていないかもせんが、もしよければあたしとお友達になつてもらえませんか」

ぱりっと零れ落ちた言葉に自分でも驚いていた。

先程の憂いげな表情からいつてん、呆気にとられたような表情をしている。

「別にわたくしは貴方をよく思つていらないわけではありませんわ。貴方の選択肢はひとつではないところ」とを示しただけです。本当に・・・・・変わった人」

選択肢？ それはつまりお城に残るかお城を去るかのどちらかってことですよね？

それ以外の選択肢つてあるんですか。

「友達、そんな風に言われたのも初めてですわ。だいたい心中で何を思つているか分からない人ばかりの世界ですもの」

「あたしはこっちには知り合ひはいません。マーガレットさんやシリビアさんもとても優しくしてくれますし、あたしを気遣ってくれます。でも、良いところは良い、悪いところは悪いと言つてもらつたほうがあたしは嬉しいです。自分が気付けていないところを直していくには周りの人たちの言葉が一番ためになると思つから」

「それでわたくしのその役を頼みたいと？」

「はい。せつとアイリスさんなら厳しく訓つてくださいね。どうじやないかと思つて……。駄目ですか？」

今までお兄様たちに譲られてきて、甘やかされてきたから。自分で気付けないと放つておきたくない。

「分かりましたわ。わたくしは厳しいですわよ。」「はい、よろしくお願ひします！」

本当に嬉しくて微笑んだ。帝都には知り合には誰ひとりいなくて、話を出来る人もマーガレットさんやシルビアさんだったり陛下だったりと限られていたから。

「「いのこの」をまだされたつていつのかしづ」

アイリスさんが呟いた言葉に首を傾げる。不思議に思つてみるとくすぐると笑い出した。

「「いのんなさい。少し思に出してしまつて」

お友達になれたので少し気まずかったのも緩和されたみたいでいりいろとお話が出来た。

自分のことだつたり陛下たちの幼い頃の話だつたり。

「またこんなふうにお話してくれますか？」

「ええ、いつでも」

「今日は本当にあつがとつていきました。すつゝく楽しかつたです！」

「わたくしもですわ」

お前にアイリスさんとのお茶会を終えた。

「お帰りなさいませ、ラヴィ様」

「アイリス様とのお茶会はいかがでしたか?」

部屋に戻ってきて今日聞いたお話のことだったりアイリスさんと友達になったことを報告した。

「余計なことを言つてしまつたのではと気にかかつておりましたが、楽しかつたのでしたらよかつたです」

もうすっかりとそのことが頭から抜けていた。

現状が自分が思つているよりも難しいものでも、必ずしも望んだ結果になるわけじゃないから。

考えずにいられたらきっといいのに。

綺麗な華再び？（後書き）

自分の思こと周囲の思惑にはさまれ徐々に心で葛藤はじめました。

やつぱりもう少しプロットを練らうかなと思つてもいたり。けど、

このまま進めて陛下視点での補足も考えていました。

後者の方が有力なんですけどね・・・。

兄弟の思いその？（前書き）

兄たちの思いその？

ラヴィが帝都に行つてから約ひと月が経つ。

手紙で近況の報告は来るがやはり心配でたまらない。友人が出来たのだと今回の手紙に書いてあつた。

あちらでも一応上手くやつているみたいだけど・・・。

「変わりはないみたいだね・・・」

「ああ。向こうでも友人と呼べる人が出来たみたいだしな」

皇帝陛下の思い出の人の件は嘘ではなかつた。

嘘ではなかつたけれどそれがラヴィである確証はまだない。

あちらがもし本気なのであるなら・・・いや、本気だからこそあの言葉なのか？

「本気でラヴィを皇妃に？ ならもう少ししゃんとした形式をとつてもらいたいところだね。いきなり現れてラヴィが困つている人を放つておけないのを知つてか知らずかあんな方法に出て。向こうに行つてラヴィが混乱するのは目に見えるのに」

「お試しや客人つて言つたのは向こうからだ。それなのに向こうでは皇妃候補として扱われてもラヴィはきっと無下には出来ないだろう？」

卑怯だと思つよ、例え皇帝陛下でもね。

皇妃候補としての打診は正式なものじゃないし呼び戻そつと思えば僕たちはいつでも呼び戻せる。

ラヴィ本人がそれを納得すれば今すぐにだつて。

「だがきっと途中で投げ出したりはしない。ラヴィのそういう優しいところは長所だが、優し過ぎるのは短所にもなる」

ラヴィの存在が未だに公にはされてない非公式なものだからまだいいのだ。

これが公式にでもなればラヴィは断れなくなる。

その辺の配慮はしつかりしていいのだけどまだ足りないと僕は思う。

あの子が自分の魅力に気付いていいのは僕たちのせいでもある。いるだけでその可愛らしさから人の目を惹く。

「社交界とかにも滅多に出でないから、あの子は自分に向けられている視線の意味を知らない。ううん、今だって知らなくてもいいと思つてゐる」

「知つたら逆に悩むだろ。まあ、自分に向けられる好意に気付いていないからなあ」

誰に似たのかラヴィは天然なところがあつて周りに気を配れるが自分に關してだけは気付けない。

だから護りやすかつたというのもあるけど。

「思い出の人といえば……ラヴィにもいたよね」

ラヴィがまだ幼いときに家族全員で出かけた湿原。

観光地にもなっているあの湿原がラヴィはとても気に入つていて今でも一人で出かけていくほど。

「お月さまのお兄ちゃん、か」

「たつた一度会つただけのやつをラヴィはずつと覚えてるんだよな」

本当に小さな頃は病弱で外にも出ることが出来なかつたラヴィはいつも外で遊ぶ子供たちを窓から眺めていた。

それだけ湿原での出会いは忘れられない出会いだったということだ。

「もしも運命が存在するとしたら、その出会いが偶然じゃないとしたら・・・どこの誰とも知らない相手を思い続けるのかな？」

「今まだ思い出の中の人物というだけで、特別な想いを抱いているわけじゃないだろ？」

「偶然再会して本人だと分かれば思いが変わりだす可能性は高い。吉と出るか凶と出るか・・・うちの可愛い妹さまは厄介ごとに巻き込まれる性質だな」

元からの性格があれだからね。

自分から首をつっ込んでしまうときもあれば本当に巻き込まれたというときもある。

どちらかといえば首をつっ込んでしまうことの方が若干多いかもしれない。

「僕たちだつて自分たちの得意な分野でそれなりの人脈を広げてきたつもりだよ。やろうと思えばその相手を探してあげることだって出来るかもしね。ラヴィが選んだのであれば僕は反対しない」「それは俺たちだつて同じだ。もちろん父さんと母さんも」

今は遠く離れている両親にも随時報告はしている。

なにかあれば帝都に向かうのが決まったときのように飛んで帰つてくるだろう。

本人もお試しと思つてゐるから一度はノリツに戻つてくると思つ。

「全ては可愛い妹のため」

領きあつと決意を新たにした。

執務室」見学？（前書き）

お久しぶりな上に短いです！ 途中から割り込んだものは意外と短
め。rz
始終クロエ視点です。

「執務室」見学？

「陛下の仕事姿が見たいと？」

アイリスとのお茶会から数日してラヴィ様が私の元を訪れてきていた。

心配は要らないと言つたがやはりアイリスのことだからなにか厳しいことでも言わなかこと内心では心配していたがどうやら杞憂だつたようだ。

それにしてもアイリスは何を言われたんですかね。ラヴィ様が私を見て首を傾げていた。

「え、はい。駄目、でしようか……」

「いえ、そんなことはありませんが」

陛下の普段のお仕事をしている姿が見たいらしい。
これはいいチャンスになるかもしれない。

「そうですね。では見学しましょうか」

「ありがとうございます！」

「（わてさて、陛下には秘密で行きますか。言つたら仕事に手がつかないでしょ）」

ラヴィ様を連れて「ひとつと陛下の仕事風景を見に行くことになつた。

会うときは限られていて、やつなつと見ると見ることの出来る範囲が決まつてくる。

「 」

現在、陛下の執務室のすぐ隣の部屋にいます。
ここは来客などが来たときに使う応接室で、その扉をスイッチ
開けた状態にしている。

そうすればわざわざが陛下の様子も見る事が出来る。

「少ししたら私も向こうに戻りますが大丈夫ですか？」

「はい。ちゃんと静かにしています」

本当にお試しではなく皇妃候補としてここにいてほしい。
ラヴィ様にそのつもりはないとしても、我慢を言っているのは
ちらの方だ。

分かっていても、陛下がお選びになったのはラヴィ様だけ。
陛下がお求めになつたのはこの太陽のような少女だけなのだ。
宰相として、友人として、自分はそれを叶えてさし上げたい。

徐々に執務室へと人がやつてきては出でていく。
真剣に執務に取り組む陛下の姿は一体どのよつて『』といふ
か。

「なんだか・・・全然違う人みたいですね。お会いするときはほつ
も穏やかな雰囲気なので」

確かに仕事の際の陛下に穏やかなときなど一切ない。

政治は言葉ひとつで変わってしまうほどので王は繊細な判断を迫られることだつてある。

疲れた顔ひとつせず黙々と仕事に取り組んでいた。

「けど、新しい一面を見ることができて少し、嬉しいです」

これはいい方に進んでいとつてもいいのだろうか。

「お兄様たちは自分の仕事に熱心でたまに食事も忘れてしまうことがあるんです。人々により良いものをと考へて頑張つている姿を見ると、それだけ自分の仕事に誇りを持つてゐるんだなつて、あたしも出来るだけ手伝いたつて思つんです。なんでもいいから手伝うと言つても、どんなに疲れていたつてあたしが笑つていてくれたらそれでいいつて言われてしまふんですけどね・・・」

もしやお兄様がたと重ねられているだけだつたらどうする。

ここはひとまず陛下の方に話を逸らして、いやしかし陛下本人がまだ話すつもりは無いようだが。

ヒントぐらいを伝えるのはいいのだろうか。

「どんなに疲れていたとしても、大切な方の笑顔で癒されるということではないでしょうか。ラヴィ様のお兄様がたはラヴィ様をとても大切にされていらっしゃるようですから」

「少し、過保護だとは思いますけど」

「確かにそうですね・・・」

最初に伺つたときの対応から過保護なことは分かつていて。

しかし最終的にはラヴィ様に甘いらしく、ラヴィ様の意思に任せていた。

「ですから、」

陸下も回じなのだと悟もつとしたら向こうからのかの声に遮られた。

「せつじえぱクロヒはぢ」に行つたんだ」

「クロヒ様でしたら先程からお姿が見えられませんが・・・」

「本人がチャンスを遮つてどうする!..」

沈黙が流れていき、遠慮がちにラヴィ様がこちらを見た。

「え、えつとあたしは大丈夫ですからクロヒ様は戻られても・・・

「・・・そうですね、すみません」

窓から出てわざわざ遠回りしてから陸下の執務室へと足を踏み入れた。

「すみません。少し私用で出ておりました」

まさか隣にラヴィ様がいらっしゃるなんて思つてもいないう。ある程度時間が経つたらじつそり窓から出て部屋に戻ると言つていたので大丈夫だと思つ。

少ししてからちらりと視線をやると僅かに開いていたはずの扉は閉まっていた。

帰られたのだろうと思つたが最後まで陸下には伝えなかつた。

執務室見学？（後書き）

自分でせつかくのフォローチャンスを遮ったので些細な意地悪で教えなかつた、つていう感じですかね。

ラヴィは陛下の違つ一面を見ることは出来ましたが、書いている本人も不思議なくらい恋に変わるのかな、これ！
いや、うん、ちゃんと変わります！ 変わりますから！

華やかな場所（前書き）

すみません、一人称の件ですがやはりプロット通りのもう少し後に
なりそうです・・・！

お城でわざやかな夜会が開かれるそいつです。なんとあたしにも参加して欲しいとのこと。

帝都はノリツよりも住んでいる貴族が多いし、階級とか凄く気にされると思つんです。

現状、陛下のお客様としてここにいるあたしが出席なんて滅相もない。

それに衣装も持つてきていないと、ばば陛下からのプレゼントだと渡されてしまった。

「出ないわけには行かないよね・・・」

「やはり乗り気ではありますんか?」

「夜会が開かれるのは明後日ですから、もし無理そつでしたら体調不良という感じで辞退の申し出が出来るとは思いますが・・・」

でもそんなことをしたらきっと陛下に失礼に当たるから。ノリツのよう前に昔から交流のある人はこちらにはほとんどいないから、あたしだけ。

いつも兄たちが一緒にいてくれたから怖くなかったの!」

「もう少ししつかりしないと」

「こつまでも兄たちが傍にいてくれるわけじゃない。

「クロエ様やアイリス様も」出席されるはずですからおふたりの傍にいられればよろしいのではないでしょうか」

「あつと陛下もクロエ様もお考えになられていましたわ」

励ましてくれるふたりに心配をかけないようにと頷くと微笑んだ。

「ささやかなつて言つけれど、ノリツで開かれるものとは全然規模も違うよね」

「人が多いですから」

とりあえず失礼がないように礼儀作法とかアイリスさんに見てもらつた方がいいかも。

一応お伺いをして時間があるようなら会つてもらおう。

「というわけなんです」

時間があることなのでさつそくアイリスさんと会つて事情を説明した。

「あの人は・・・」

またなにやらぼそりと呟かれていたけれど聞き取れなくて首を傾げる。

「なんでもありませんわ」

あたし耳悪くなつたわけではないよね？
えつと、あつと風が浚つていつたのかも！

「礼儀作法の確認でしたわね」

「はい。一応礼儀作法に関しては幼い頃から厳しくしつけられてはきたんですけど、こちらでも同じで良いのかと思いまして・・・」「そうですね。今のままでも十分通用するとは思いますけど、時と場合によつて使い分けることを覚えた方がいいかもしませんわ」

ふむふむと頷きながら話を聞いていく。

もし自分に姉がいたとしたらこんな感じなのかな。

夕方までじつづつ話して当田にじづくかなどを決めた。
アイリスさんとクロエ様の傍に立つことで話はまとまつた。

「ドレスは持つてきてはいませんわよね？ どうなされるのですか？」

「それは、あの・・・陛下からプレゼントだと・・・」

あたしに似合つのかどうかは分からなければきっと高そうなのではないかと思つ。なんだか申し訳ないといつた。

それをアイリスさんに話したら呆れ顔で言われてしまった。

「貴方が気になさらなくてよろしいですわ。あの方が贈りたくて送つただけですもの。それを着て笑つて差し上げればいいんですよ」

「はあ・・・」

あいまいに頷いて濁したけれど出なきやいけないので着ます、よ

? はい。

ただ似合つかざりかは別問題だと思つんですよ。着られてこる」とにならなきやいいんですねけど。

「でもお密といふがお試しでここにさせでこただいてこるの」、贈つてこただくなんて・・・やうこいとつてよくあることなんですか?」

「いいえ。それだけ貴方が大事なお密さまだとこいとではなくて?」

大事なお密さま、大事な・・・なにが?

あたしのなにがあの方の皿に止まつたのでしょうか。

「やういえばラヴィ様にお聞きしたい」ことがあつたんですね

「え、はい。なんでしょう?」

首を傾げると真剣な表情を向けられて、くつと息をのむ。

「ラヴィ様は陛下のことをどう思つてこらへしゃるのですか?」

「え・・・ひと、優しくて良い方だと思こますけど・・・あと、とても眞面目で表情豊かな方だと」

執務室をいつそり見学させていただいた時に見たいつも見る陛下の違う一面。

あんな風に忙しいながらもわざわざあたしとの時間を設けていただいたり。

「言葉に出す」とはなかつたけれど、カッコいいと思つた。

「では皇帝陛下としてではなく、ひとつの男性として?」

思考がぴたりと止まつた。あたしはやれに對して答へる「」
が出来なかつた。

だつて考えたことがなかつたといつが、そんな風に見たことがなかつた。

皇帝陛下といつ自分よりも上の立場にいる方で、隣にこせつてただくのも恐れ多いのに。

「「」みんなを。どうやら困惑させてしまつたみたいですね」
「あ、え、いえ・・・・・」

心臓の鼓動がやけに早く感じる。

よく分からぬいけど頭がぐるぐるといふからがつてこるみたいな感じ。

なんだか陛下と顔を会わせびらくなつたよつの気がする。

そんな感じで夜会が開かれる日まで酒み続けゐることになつたのだつた。

華やかな場所（後書き）

またしてもアイリスが核心に迫ることを言いました。ぶっちゃけ最初に考えていたのよりもアイリスがキーパーソンになつていてる気がします。

ここから一気にラヴィの心情が変化していくのを書いていけたらなあと思っています。

ちょっとした補足をば。

陛下に近い人間や上層部の人間は（お試し）皇妃候補であることを知っています。

それ以外のお城で働いている人々は大事なお客様であるといふことしか知りません。

クロエが言っていた、いづれかの部分は皇妃候補のことを探していました。

華やかな場所？

とうとい夜会の口がやつてきました。

あたしはクロヒ様と共に会場に向かうことになっています。

「うふふ」

「うふふふ」

えつヒマー ガレットさんとシルビアさんが少し怖いのですが。
先程からずーっと笑っています。

「あ、あのふたりとも？」

「ラヴィ様を着飾る絶好のチャンスですものー。」

「他の令嬢たちなど霞むほど麗うしくして見せますーーー。」

気合十分と言つた感じなんだけれど、さよと熱くなつ過ぎとこつ
か。

陛下はおこりしへのアーリスさんとの会話の口から会つてこ
ない。

正直、少しだけほつとしている自分がいた。普通に接することが
できる自信もなかつた。

「ほじほどにお願いします」

「わつにわけにはこきませんーーー。」

「ラヴィ様はとても素材がいいのですからきっと仕上がりもばっち
りです。どのような感じにするのか考えて眠れなかつたほどですも
の」

は、ははっと乾いた笑いを浮かべるしかなかつた。

マーガレットさんとシルビアさんにより施されたお化粧から髪型まで。

鏡に映つてゐる自分を思わず何度も見返してしまつた。これが本当に自分なのだろうかと。

「このドレスもラヴィ様にぴったりですわ」

「ええ。淡いクリーム色の生地に部分的に施されたレースは甘過ぎず、その中に大人っぽさも垣間見える一品です」

お姫さまのようなドレスだと最初に見て思つた。自分に本当に似合つのかと。

他の参加者の顔にはどう映るのだろう。

一番気になるのは陛下の顔にどう映るのか、だけれど。

こんこんとノックの音が聞こえて返事をするとクロエ様が入つてこられた。

「失礼します。ラヴィ様、そろそろ……」

ぴたりと止まつてしまわれた。

「あ、あの……？」

「私が先に拝見しても良かつたんでしょうか」

苦笑しながら顔つくりに首を傾げる。

「すみません、今のは聞かなかつたことにしつべださい。それではそろそろ参りましょうか」

「は、はー」

どきどきしながら待機室へとやつてくればアイリスさんもすでに来ていた。

「とてもお似合いですわ、ラヴィ様」

「ありがとう」ゼコます。アイリスさんもとても綺麗です」

ワインレッドのロングドレスがとてもよく似合つてゐる。あたしとは本当に正反対な人だなと改めて思つ。それほどアイリスさんは綺麗だった。

「陛下の御着きです」

廊下から聞こえてきた声に心臓がひとつわ大きく脈打つた。扉が開いて陛下が入つてこられた。誰かにとたつと肩を軽く押されて一步前へと出る。

「ラヴィ・・・・・?」

「とても驚いたような雰囲気なんですねけど。やつぱり似合わないかな。

俯こうとしたら陛下がふつと微笑んでとても優しげな眼差しを向けられる。

「ありきたりな言葉かもしないが、とてもよく、似合つてゐる」「あ、あり、が、どう、」ゼコます

別の意味で俯いてしまう結果になつた。赤くなつてしまつた顔を隠すように。

「アイリス、貴方一体なにを言つたなんですか？」

「責められるよりな」とではあつませんわ。少し、背中を押しだだけです」

そうなんですね。アイリスさんがあんなこと聞かれるからー

「どうした?

「なんでもないです！」

勢いよく顔をあげるとぐつと手を握り締めて笑つた。

「あまり無理はするな。クロエに言えば退席しても構わない」と

とうとう開演の時間がやってきて心を決めた。

先にアイリスさんとケンエ様と共に会場へと入ればやはり物珍しいのか視線を集めてしまう。

「…………」

「大丈夫ですわ、ラヴィ様。私たちも傍におりますし、陛下もいらっしゃいますから」「が、頑張ります」

じきじきと逸る鼓動を落ち着けるよ／＼一度目を閉じる。

大丈夫、あたしは陛下のお客様としてこの場に立っているのだからあたしがしつかりしなければ。

心を落ち着けると田をゆっくりと開けて前を見据えた。

「（「これは……」の方には本当に驚かされますね……）」

「（雰囲気が一変ですわね。今まさに孵化された蝶のよう。これからもつともつとお綺麗になられるでしょうね）」

やはりノリツとは違いとても華やかだ。
目がちかちかしてしまいそうなほど。

「大丈夫ですか？ ラヴィ様」

「はい。クロ工様はここにいらしても大丈夫なんですか？」

「ええ。こういう場では特に仕事はありませんからね」

アイリスさんは次々とダンスに誘われて中央で貴族の子息さんたちと踊られている。

陛下はたまにこちらを見てはふわりと微笑まれる。
直線上にいる方々や偶然見てしまわれた方は顔を僅かに赤く染められて陛下に見惚れていた。

「……本当だつたんですね」

実際に見ると本当だつたんだなあと。

「仮面があつてこれですからね。仮面がなければ今頃地獄絵図でしたよ。（ラヴィ様がいらっしゃるから余計にと言つた感じですかね。向けられている）本人はけろつとされてますが」

「霧囲気でも駄目つていう方がいらっしゃるところのはじつこじつ」とでしたか。

耐性があるとこクロエ様やアイリスさん以外に顔を赤らめない人つてこの中にいるんでしょうかね。

そう思つていたら陛下がこられて手を差し伸べられる。

「踊つてもらえるか？」

「！ は、はい」

周りからの視線が物凄いです。好奇から疑念に嫉妬まで。そんなに見られると恥ずかしいんですけど。

踊つている間、常に陛下に見られていて顔が赤く染まる。触れ合つてている手から伝わる体温も心臓の鼓動を早くさせる。夢のような時間も終わりは来る。

「陛下」

クロエ様に声をかけられてハツとする。

踊り終わつたのにしばらくそのままだつたようです。ペコリと一礼して壁の方へと下がる。

「あの、クロエ様」

「どうされましたか？」

「少し外に出てもいいですか？」

「構いません。おひとりでも大丈夫ですか？」

「はい」

許可を貰つてバルコニーへと出た。
まだ心臓がドキドキっていた。

華やかな場所？（後書き）

徐々に、徐々に進んでいっています。
書いてる自分がもぞ痒いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9745t/>

月光陛下と太陽妃

2011年10月8日23時57分発行